



TITLE:

情報の収集と交流:雑感

AUTHOR(S):

小川, 和朗

CITATION:

小川, 和朗. 情報の収集と交流:雑感. 静脩 1982, 19(3): 1-3

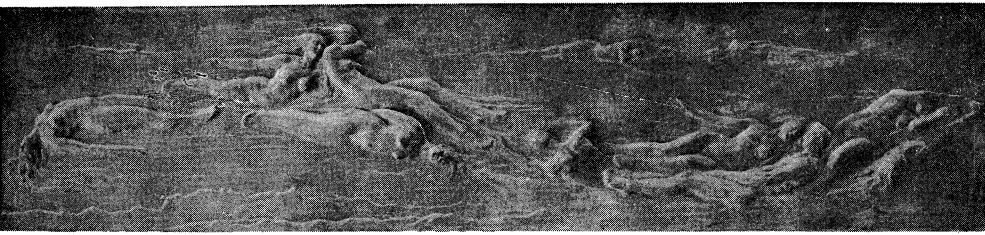
ISSUE DATE:

1982-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36910>

RIGHT:



静脩

1982年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 19, No. 3

情報の収集と交流：雑感

医学部教授 小 川 和 朗

去る10月、ドイツ民主共和国（いわゆる東ドイツ）ライプツヒ大学のルッパ（H. Lupp）教授に招かれて、ハレ（Halle）で開催された学会に出席し、学会の前後に、ライプツヒ（Leipzig）、イエーナ（Jena）、ワイマール（Weimar）などの都市を見学する機会を得た。ライプツヒは数百年に亘り継続されている、春秋年二回のライプツヒメッセ（見本市）で有名な産業都市であり、ライプツヒ大学は、1409年に設立され、ヨーロッパではチェコスロバキヤのプラハ大学に次いで古い由緒ある大学である。1953年以来、ライプツヒ・カルルマルクス大学とよばれている。この大学では、ハイゼンベルグ（W. K. Heisenberg）やオストヴァルト（F. W. Ostwald）が教鞭をとり、ゲーテ（J. W. von Goethe）、シューマン（R. Schumann）、ワーグナー（R. Wagner）などが学んでいる。解剖では、我々が学生の時に用いた名著「人体解剖アトラス（Handatlas der Anatomie und Menschen）」を書かれたスパルテホルツ（W. Spalteholz）教授がおられた大学である。ゲーテといえば、ライプツヒの町の中心部には、ゲーテが学生時代よく通い、ファウスト（Faust）を書いた時のモデルとなったアウエルバッハスケラー（Auerbachs Keller）といわれる地下レストランがあり、そのケラーにはファウストからのいろいろな場面が壁画になっており、雰囲気醸し出している。ワイマールには、ゲーテが長年住んで

いた住居や別荘があり、イエーナ大学解剖学教室にはゲーテが顎間骨（Zwischenkiefer）の比較解剖学的研究に用いた標本がそのまま展示されている。この度の旅行で始めて知ったが、シラー（F. Schiller）はイエーナ大学解剖学教室で数年間、解剖助手をしていたそうである。因みにイエーナ大学は、今、イエーナ・フリードリッヒシラー大学とよばれている。

これらの都市を廻り、ゲーテ、シラーを始め、バッハ（J. S. Bach）、ヘンデル（G. F. Händel）など、平素よく耳にし、あるいは目にする数多くの偉人の生活に直結した足跡に肌で触れると、この地方の歴史、文化の底深さをひしひしと感じた。中でも、ルッパ教授に案内されライプツヒのドイツプラザにあるドイツ図書館（Deutsche Bücherei）を訪問した時にはその気宇の壮大さに感服せざるを得なかった。このドイツ図書館は建築学的にも興味深い建物のようなのであるが（図1、2）、1912年9月25日に設立され、ドイツ語で書かれた凡ての資料を収集することを目的とした、特徴ある図書館である。その目的の壮大さには驚かされる。ライプツヒ大学附属図書館は全く別であり、ドイツ図書館はライプツヒ大学とは直接の関係はない。ドイツ図書館には1980年12月31日現在で7,056,257点の資料があり、毎年約30万点づつ増えているようである。旧館（図1、図2の右側）と新館（図2の左側）からなり、旧館と新館の間



図1 ドイツ図書館（ライプツヒヒ：『本の町』ともいわれている）正面玄関

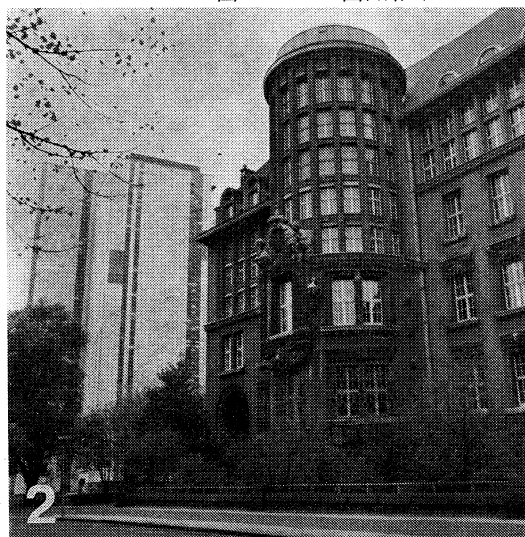


図2 旧館（右側）と新館（左側奥）

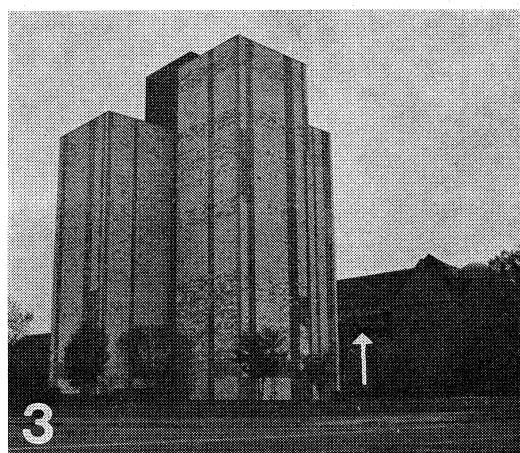


図3 新館（左側手前）と旧館（右側）の間にある、自動的に資料を輸送するチューブ（矢印）に注意

には、書籍などを自動的に輸送するチューブ（図3矢印）がある。

ある図書館ないし情報センターで情報の収集を目指す場合、どこにでもあるような情報を万遍なく収集することにも意味があるかも知れないが、何か特定の目的をもって情報を収集し、ある情報に関してはそこに行けば何でも得られるという、『特徴ある、ユニークな情報センター』を作ること極めて有意義なことであろう。

ドイツ図書館は勿論国費で賄われているのであ

ろうが、ドイツ語で書かれた凡ての書籍、楽譜、手写本、フィルムなどを収集するには相当の経費が必要なことであろう。本年前半に、ある国の教授より書信があり、国家的外貨不足のために外国からの書籍、雑誌、研究用試薬など一切の購入が全面的に不可能になり、情報の収集と交流に極度の不便を来し、研究上にも支障を来しているということであった。一国の経済状態はあらゆる面に影響を及ぼすのである。研究を遂行するためには2つの欠くべからざる要素、すなわち、

idea と money, が必要であるといわれている。特徴ある情報センターを確立する上でもこの2つの

要素は必須なのであろう。日本経済の正常な発展を祈って止まない次第である。

「東洋学文献類目」編集作業の電算化について

人文科学研究所附属東洋学文献センター

都築 澄子・志水喜久子

1. 「東洋学文献類目」の編集方針

人文科学研究所附属東洋学文献センターでは、研究所で受け入れた図書及び雑誌所収論文の中から中国を中心とした東洋学に関連するものを選別、分類・編集し毎年1冊の冊子として発行している。これは、昭和9年より「東洋史研究文献類目」として発行され、昭和36・37年は「東洋学研究文献類目」、さらに昭和38年からは「東洋学文献類目」（以下「類目」と略す。なお、この年から採録年表記を西暦に変えた。）と改題し、現在に至っており、広く国内外の東洋学研究者の利用に供している。

その構成は日本・中国・朝鮮文篇と欧文篇にわかれ、それぞれは論文の部と単行本の部からなっており、巻末に人名索引を付している。分類は「類目」独自のものを使い、採録範囲は、地理的には、中国を中心として東は朝鮮、南は東南アジアからインド、パキスタンまで、西は中央アジア、北はモンゴルまでとするが、中国との関連において多少の伸縮がある。また、文献的には1976年版から研究所に受け入れする図書・雑誌からの採録を原則としている。もっともこの原則は刊行当初からそうなのであって、「類目」はもともと所蔵文献目録として始まったのである。所蔵目録の範囲を超えて総合目録の性格を有するようになったのは、昭和26・27年版からのことで、1976年版から当初の原則にもどそうとしているのであるが、ただ和書の単行本に関しては、便宜を考え出版年鑑等から補って編集している。欧文篇は雑誌所載の書評論文によって過去5年間までに発行された図書の書評を採録するので、原本がなくて書評だけが採録されるケースが極めて多い。つまり、日本・中国・朝鮮文篇では雑誌論文が主体で

あり、欧文篇では単行本の部の書評論文が主なのが本誌の特徴なのである。

表1

採録タイトル数の推移

年		1976	1977	1978	1979	1980
日本・中国・朝鮮文	論文	4211	3408	4342	8714	10133
	単行本	623	544	745	738	976
欧文	論文	757	659	812	963	903
	単行本	956	888	826	1079	1034

採録誌数の推移

年		1976	1977	1978	1979	1980
和雑誌		330	350	356	363	376
中国雑誌		53	43	79	158	175
朝鮮雑誌		13	14	15	24	18
論集		13	8	11	22	45
小計		409	415	461	567	614
欧文雑誌		78	77	85	98	95
計		487	492	546	665	709

最近における採録数の推移は、別表1の通りであるが、特に中国雑誌及び単行本の数は、中国における文化大革命終焉後の活発な出版活動を反映して、特に1978年から1979年にかけて論文数が急激な伸びを示している。採録数が増えると編集に手がとられるし、印刷にも面倒が増える。こうした傾向は1976年版編集当時からすでに顕著になっていたもので、先に述べたように採録誌を研究所所蔵のものに限ったり、採録基準を厳しくしたりして対応策を講じたけれども、「類目」の発行が毎年約1ヶ月ずつ遅れるという事態が続いた。「類